



1月13日[月・祝]13:00開演
作・演出＝永井愛
出演＝朝倉あき、藤野涼子、大西礼芳、
夏子、富山えり子、須藤蓮、枝元萌
会場＝PLAT 主ホール
二兎社公演43

私たちは
何も
知らない

空気を读まない女たちが
マジで議論した「青鞥」編集部の日々

朝倉あき[あさくら・あき]／福岡県朝倉市生まれ。神奈川県出身。映画『歓喜の歌』(2008)でスクリーンデビュー。スタジオジブリ『かくや姫の物語』(2013)でかくや姫の声を担う。主演した『四月の永い夢』が2017年モスクワ国際映画祭で国際映画批評家連盟賞・ロシア映画批評家連盟特別表彰をダブル受賞。テレビドラマ『下町ロケット』(TBS)で注目され、映画『七つの会議』(2019)ではキーパーソンを演じて人気を集めた。放送中のドラマ『グランメゾン東京』(TBS)にも出演。二兎社は『書く女』(2016)以来2度目の参加。

が、確かに天然というか、失敗してしまうところはあるなと思いました(笑)。それと、らいてうは、自己が何たるかということを、若い時分から考えていた人だと思うんです。私も、学生時代から、自分は今何がしたいんだろうとか、自分の何がいけなかったんだろうとか、自分自身に矢印を向けて考えるということをよくしてきていて。「それは考えすぎ」なんて周りに言われることもありましたね。

藤本——二度目となる永井さんの演出についてはいかがですか。

朝倉——とても情熱的な演出をされる方ですね。この言葉を何のために言うのか、役者自身で考えるということ、とことん大事にしていращやる。そんな演出を受けたことで、『書く女』のときも、教科書の中でしか知らなかった古い時代の人物がだんだん自分に近づいてくるような不思議な感覚を味わえたんです。今回も、セリフを一回自分の中に沈めた上で、自分の経験や感じたことを大切に、私自身の言葉として出すようにしていきたいと思っています。それぞれの役として交わす言葉が呼応する形でできあがっている群像劇なので、自分で感じている以上のものが、会話の中で自然と出てくるということもあると思うんです。そこを自分でも楽しみたいですし、ご覧になる方にも楽しんでいただけたらいいですね。

藤本——今回、100年前の女性たちを、現代の服装で演じられるとか。

朝倉——その演出をうかがったとき、とてもおもしろいなと思いました。口調とのギャップ、違和感も楽しんでいたけたらなと。「昔の時代のことではなく、今の時代にも共通する問題であることを、観ている方に感じてほしい」というのが、永井さんの演出の意図なんです。100年前の女性たちより、今の時代の女性の方がもちろん自由にふるまえている。けれども、まだまだ残されている問題もある。そういった問題に対する静かな怒りをどのようなエネルギーをもって乗り越えていくか、今回、永井さんは描こうとされているんだと思います。

藤本——『書く女』以来、約4年ぶりの「穂の国とよはし芸術劇場PLAT 主ホール」への登場です。

朝倉——お仕事で足を運ぶことも多く、中部地方には非常に思い入れがありますね。蒲郡で開催されたジブリの展示会におうかがいしたこともありますし、それと、中日ドラゴンズのマスコット「ドアラ」が大好きなんです(笑)。地方地方、劇場劇場によって味わえる異なる空気も、舞台に立つ上では大きなパワーとなるんです。とよはしの舞台に立って感じるものもしっかりと味方にし、大切に公演を務めたいと思います。

10月17日に雑司ヶ谷稽古場でインタビュー、写真撮影現場に伺いました。前日に初めての顔合わせがあり、「稽古が楽しみ」と語り、すくっとした立ち姿から平塚らいてうを演じる雰囲気を感じ出していました。新作ってこの緊張感が素敵ですね。

藤本——二兎社の公演に出演されるのは、『書く女』(2016)以来、二度目ですね。

朝倉——再び永井さんの演出が受けられることを夢のように思っています。『書く女』では、黒木華さんが演じられる樋口一葉の妹を演じさせていただきました。そのとき舞台に立っていて、自分に役が降りてくるような不思議な感覚を味わったんですね。舞台中央に立つ黒木さんを見ていて、……どこかに吸い込まれそうだな、舞台ってすごい空間なんだな……と感じたことを覚えています。

藤本——今回の作品では、樋口一葉が活躍してから少し後の時代、明治末期から大正初期の時代に、女性たちの手で作られ、話題を呼んだ雑誌「青鞥」の発起人の一人、平塚らいてうを演じられます。

朝倉——教科書で名前を知っていた程度でしたが、今回のお話をいただいて調べていくうち、演じられることが誇りに思えてきました。心中事件をはじめ、エキセントリックな話題も多かった人ですが、実は、思慮深く、内向的な女性だったそうなんです。

藤本——声が小さい人だったそうで、そこも、書いている文章とのギャップで意外だなと。

朝倉——そのギャップが魅力的ですね。永井さんいわく、らいてうは、自分の意見をまっすぐ言うような気の強いキャラクターではないと。大声で語るわけではなく、小さい声でぼそぼそしゃべって、周りが聞き返してしまいう感じ。彼女の発するわずかな言葉と、彼女から滴のように生み出されていく文章に、周りの人々がひかれていったそうなんです。そんなお話をうかがってはいましたが、台本を初めて読んで、「わたくし、〇〇だわ」という彼女の口調に、こういう風にしゃべる人なんだ! と新鮮な驚きがありました。読み合わせしていても、登場人物と、その役を演じていращやるキャストの皆さん、それぞれが本当にぴったりに感じられて。それまで、頑張って自分を役に近づけなきゃと思っていたのが、私たちを選んでくれた永井さんを信じればこのままで大丈夫なんだなと、不思議な安心感が湧きました。

藤本——何か共通点を感じるころはありますか。

朝倉——私もそこを永井さんにお聞きしてみたいです。すると、「品があるところと天然が入っているところ」という答えが返ってきて。品の方は自分ではわかりません

二十代の女性五人が集まって
雑誌作りという冒険を通して味わう高揚感や苦悩を描く青春群像
「青鞥」発起人の一人、平塚らいてうを演じる、朝倉あき
聞き手・藤本真由 舞台評論家 出演

小曽根真&児玉桃 スペシャル・コンサート

自由奔放なジャズ・ピアニスト小曽根真と

欧州を拠点に活躍する正統派クラシックピアニスト児玉桃の共演

2月11日[火・祝]16:00開演

ピアノ=小曽根真、児玉桃

打楽器=大場章裕、西岡まり子

会場=PLAT主ホール

小曽根真[おぞね・まこと]／1983年バークリー音大ジャズ作・編曲科を首席で卒業。同年米CBSと日本人初のレコード専属契約を結び、アルバム「OZONE」で全世界デビュー。2003年グラミー賞ノミネート。ソロ・ライブをはじめチック・コリア、ゲイリー・バートン、ブランフォード・マルサリス、パキート・デリベラなど世界的なトッププレイヤーとの共演や、自身のビッグ・バンド「No Name Horses」を率いるなど、ジャズの最前線で活躍。また、クラシックにも本格的に取り組み、欧米の主要オーケストラとも共演を重ねる。2018年には、NYフィルとのライブ録音「ビョンド・ボーダーズ」を初のクラシックアルバムとしてリリース。2020年にはNo Name Horsesの15周年全国ツアーを予定。映画音楽など、作曲にも意欲的に取り組み、多彩な才能でジャンルを超え世界的な躍進を続けている。2018年紫綬褒章受章。



INTERVIEW:2

撮影:©久富健太郎 5

らない。だから、この情報社会にいと何でもかんでも、成功している人ばかりが、目に、耳に入ってきて、負け組とか勝ち組という嫌な言葉が出て、すべてが丸ペケ式になるのですが、そんな丸だけの人は世の中絶対いない、ペケだけの人も絶対いない。

だから、許されたり信頼されたりするということがどれだけ人間にとって大事かということを、ジャズは、いつも見守っていてくれる。自分でやったことは全部自分に返ってくる。その代わり良いことしたときはすぐ返ってくるというか、お客さんと繋がれる。それは上手に弾くことでもなく、ただ、やらなければいけないことは、僕が即興演奏している井上ひさしさんの『組曲虐殺』の中に素晴らしい台詞があって、「身体全体でぶつかっていけ」なんです。それを観た国立音楽大学の僕の学生が「先生がいつも言っていることがよく分かりました」と言っていました。

中島—— 小曽根さんは、基本的に音楽用語ではなく「身体ごとぶつかれ!」と教えられているのですか。

小曽根—— そうです。ジャズというのは、やればやるほど褒美をくれる音楽です。ご褒美というのは、自分がこの上ない幸せを音楽から貰えるということです。それは、その人の才能とかなんとかいう前に、死ぬ気でぶつかっていったら音楽は絶対返してくるし、ジャズの場合は楽譜がない分、なにをやっても良いのですから。

中島—— 小曽根さんが、ピアノを選んだのはどのような理由でしょうか。

小曽根—— ピアノはちょっと優等生っぽいところがある。でも一番、全てを表現しやすい楽器です。ただ、全体像を表現できてしまう分、一個の音の深みが、単音楽器なんかには比べると薄いんですよね。だからクラリネットや、トランペットでもバーンと、単音でマイルス・デイビスなんか吹いたときに「ずるいよこの音は」というような音が出る。それを突き詰めていくと、一番ずるいのは人の声ですよね。だからそれに敵うものはない。そういう意味で、ピアノという楽器はある意味まとめ役みたいなところがある。

ただ自分で全部弾けちゃうところは、みんな羨ましいと思うのでしょけどね。僕から見ると、単音楽器を弾く人はいいなあと思いますね。

中島—— 小曽根さんはピアノを愛おしがって、楽しく2台のピアノを弾いていただいて幕が開いたPLATとも、やっと7年。今年はまた新しいプログラムでお越しいただくので、豊橋のみなさんにご挨拶をいただければと思います。

小曽根—— 豊橋はいつも僕にとって新しい挑戦をさせていただく大きなきっかけになる街なので、今回も挑戦のチャレンジなエネルギーを持っています。皆さん是非とも受け止めて来てください。

中島—— 来年の2月の児玉桃さんとのスペシャル・コンサートは、とても珍しい組み合わせですが、どのようなきっかけでできたのでしょうか。

小曽根—— 児玉さんとは、何年か前にラ・フォル・ジュルネの時にストラヴィンスキーの『春の祭典』をピアノ2台で演奏しました。児玉さんが僕のことを気に入ってくださり、僕も児玉さんの演奏が大好きで、随分クラシックの手ほどきを児玉さんからいただいたりして。非常に交流があります。ジャズにも非常に積極的に興味を持たれる方で。そんなことで「バルトークをやろうか」という話になりました。

中島—— 毎回、新しい発見がおありのようですが、今回特に、どういった所が聴きどころでしょうか。

小曽根—— バルトークは、ジャズとすごく近いのです。ジャズも、創ったものを創っては壊し、創っては壊し、という作業を即興でやっていくのですが、それが作曲家が楽譜に書く音楽として、その手法を取り入れた最初のころの音楽なので抽象画を観るような、聞き方というか感じ方で皆さんに聴いていただけたらいいかなと思います。

中島—— バルトークは、もともとポピュラーになっていくのかもしれないですね。

小曽根—— そうですね、絶対に面白いと思います。今までの音楽の聴き方とは違い、何もしないで無責任に聴いてもらうというか、知っているメロディを聞くということが、クラシックでもジャズでも最近多いのですが、知らないものを聴く=即興演奏というのは、弾く本人も次に何を弾くか分からない。だけどジャズや僕のファンは、いつも新しいオリジナルの曲を聴きにくる、こういう人たちは、人生の楽しみ方を知っているのです。

中島—— 山登りと同じかもしれませんね。

小曽根—— 皆さん毎日、次の瞬間に何が起こるか分からない人生を生きているのにも関わらず、コンサートでは知っている曲を聴きたいというのは、違う気がするのです。

中島—— そうですね。最近は、安定というか安心、に傾いているような気がしますね。

小曽根—— 1部でショパンを児玉さんが弾きます。そしてそれを受けて、僕がインスパイアされた即興をやります。2部は即興が楽譜に記されたような、バルトークです。聴き方としては、乗ったことのないジェットコースターに乗るようなつもりで来てください。初めて聞く物語の朗読や、初めて観る映画、初めて聞くストーリー。そのワクワクを皆さんに楽しんでもらえると思う。

中島—— ジャズは小曽根さんにとって一体どんなことなんでしょうか。

小曽根—— やはりジャズの本当の素晴らしさは、全てのことを許すというか、懐の大きさというか。正解をつく

ほんとうにいつも熱く語ってくださいます。活躍の場をどんどん切り拓いて。
二月のスペシャル・コンサートはどんな即興演奏になるのでしょうか。
安定も必要だが、揺らぎの心も持ち、新しい感性に触れたい。
聞き手 中島晴美 穂の国とよはし芸術劇場PLAT シニアプロデューサー
ピアノ
小曽根真

参加した人たちの熱量、それは自負している。

安田美知子、佐藤こうじ

舞台監督 音響

聞き手・吉川剛史 穂の国とよはし芸術劇場PLAT事業制作部



市民と創るスケッチ群像劇『話しグルマ』(2014年度)

がちゃんとしていて、あのスケジューリングをわかってる人が演出家の傍にいろかどうかということが聞きたかった。『話しグルマ』の時に、立ち位置とか出ハケ、ダンスを全部表にしていたというのが非常に大きく、これを我々のような後から稽古場に合流する人間のために記録しようと思った人が創った演劇ということに感動したのだと思います。

吉川——『はしっ子』の演出はFUKAIPRODUCE羽衣の糸井幸之介さんでした。普段は羽衣の音響も担当されている佐藤さんにはここから参加していただきました。

佐藤——僕もこれまで市民と演劇をつくるという経験はなかったです。2週間張り付いてやるというのが面白そうだなと思って引き受けました。

吉川——『はしっ子』は、1年目はアートスペース、2年目は主ホールと、作品規模を大きくしましたが、やってみてどうでした。

佐藤——1年目は小劇場の感じが良かったですね。これを主ホールでやってみたら、まず、みんなセリフが入っている、歌は知っている。新しいシーンもありましたが、一回やったことがあるか、ないかでは完成度が全然違う。しかもスタッフも一緒に2年間やれて、僕としてもクオリティーも上がったし、こうやって市民劇を作った方がいいんじゃないだろうかってくらい完成度が高かったと思います。また今年も観ましたが、何度も参加されている市民の方々がいるっていうのは素敵な企画だなと思いました。

吉川——何度も関わった方も多く、確実にスキルが蓄積はされていると思います。市民スタッフとの関わり方はどうですか？

安田——楽しみ方がわかってきたみたいな感じかな。やってもらいたいことと、やってくれることの兼ね合いができていれば、あんなに大変にならずに済んだかもしれない、それが一年目の反省で。市民の生活スケジュールを知って、それに自分が合わせていく流れの方が、みんながやりやすい。でもここだけは外せないという日程に関しては前もって押さえておく。そんなことがようやくできるようになったのが関わって3回目ですね。

佐藤——音響に関しては、専門職だから市民が気軽に手伝えなんですが、仕込みから本番まで必ず参加してくれる人がいたら、お願いできるかもしれません。

安田——俳優以外の受け皿もあるといいと思う。私のように俳優は嫌だけどスタッフには興味あるという人がい



市民と創造する演劇『とよはしの街の物語「はしっ子」』(2016年度)

る。スタッフのワークショップという入り口があってもいいと思うけど、演出家や制作などを育てようとするれば、オーディションから過程を一緒に見て、稽古場で勉強できるとすごいと思うのです。なまじ劇団に入るよりいい。見学だけ。ただし必ず毎回来る。動きが分かって、毎年違う演出家を見るという。そういうスタンスの人がいるといいなと思う。

吉川——今年度の脚本・演出は青☆組の吉田小夏さんですが、印象はどうですか。

安田——こだわり派。一緒にやった時は、4劇団の短編を繋いだものでした。なので、一つのテーマにみんながみんなにちょっとずつ寄せていたのです。でも小夏さんは「こうなんじゃないか」と徐々に自分の方に寄せる力が強い。もともと自分がやろうとしていたことを、そっちに流さず、形は変わるけど実態は変わらない。柔らかいのだけど、中々混ざらない、そんな感じでした。

佐藤——僕は初めましてですね、現場は。でもやっている作品も見ているということで、きっと通じるもの



市民と創造する演劇『とよはしの街の物語』(2017年度)

はあると思うんです。今はtwitterでコメントをしてちょっとずつ仲良くなろうとしている段階です(笑)。

吉川——プロの現場と、市民劇の違いはありますか。

佐藤——豊橋の市民劇は、小劇場をちゃんとやっている人が呼ばれている印象がある。語弊はありますが、本物というか、他の市民劇よりも密度が濃くて、俺たちもプロの場合と変わらないスタンスで臨んで、油断しちゃうけない市民劇、隙を見せたら負ける市民劇が味わえる。安田——参加した人たちの満足度。それは自負していると思うのです。参加している人たちはできるだけのことをやっているし、演出家も脚本家も、関わっている人たち全員がクオリティーを上げようとしていて、その結果が発表できるということで、相当な満足度を得られる。だから頑張りたい人がやりたい現場ですね。

吉川——その人にとっていいステップになればいいなと思います。それこそ争っている感じの熱量が豊橋の市民劇の一番いいところだと思います。

佐藤——愛知で一番ホットな場所になるといいですね。

オーディションで市民キャスト17名が決定。
俳優の大西玲子さん、細身慎之介さんを加え上演します。

3月7日[土]14:30開演・8日[日]14:30開演
原作＝メアリー・シェリー／脚本・演出＝吉田小夏
出演＝オーディションで選ばれた一般市民／大西玲子、細身慎之介
会場＝PLAT主ホール

市民と創造する演劇

グッバイ・フランケンシュタイン
—穂の国の怪物たち—

安田美知子[やすだ・みちこ] 舞台監督／花組芝居、KAKU TA、FUKAIPRODUCE 羽衣ほかPLATでは2015年「市民と創るスケッチ群像劇『話しグルマ』」、2016年「市民と創造する演劇『とよはしの街の物語「はしっ子」』」、2017年「市民と創造する演劇『とよはしの街の物語』」の舞台監督を担当。

佐藤こうじ[さとう・こうじ] 舞台音響家／Sugar Sound代表。中村嘉宏氏に師事。最近のプランニングとして、口字ック『掬う』(演出:山田佳奈)、オフィスコットーネ『さなぎの教室』(演出:松本哲也)、『内村文化祭'19三茶』(内村光良単独ライブ)、東京成人演劇部『命、ギガ長ス』(演出:松尾スズキ)、庭劇団ベニノ『蛸入道忘却ノ儀』(演出:タニノクロウ)、DULL-COLORED POP『福島3部作』(演出:谷賢一)、FUKAIPRODUCE 羽衣『ピロートーキングブルース』(演出:糸井幸之介)、小松台東劇団員、日本舞台音響家協会会員。

鈴木智子[すずき・ともこ]ピアノ／東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業、同大学院鍵盤楽器研究領域(ピアノ)修了。在学中、特別給費奨学金を得て、モーツァルテウム音楽院、ユース音楽院サマーアカデミーに短期留学し、選抜演奏会にも出演。PTNAピアノコンペティション全国大会ベスト賞、ショパン国際ピアノコンクール in ASIA 金賞など多数入賞。リパティ管弦楽団とサンサーンスのピアノコンチェルト5番を共演。これまでに、長谷川淳、渡辺健二、岡田敦子、橋本枝未子の各氏に師事。現在は、演奏活動の傍ら、コンクール審査、後進の指導を行っている。

自分が好きな曲を弾くことが一番思いが伝えられるかなと思います。
お客さまに喜んでもらいたい。鈴木智子

「若手音楽家に活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を提供する」というコンセプトのもと、オーディションで選抜された若手音楽家たちによる音楽のひとときをお届けする、PLATオリジナルのワンコインコンサート。第1回オーディションで選抜された鈴木智子さんにお話を伺いました。

中島—— ワンコインコンサートも始めた頃と比べると、かなり定着してきました。

鈴木—— 5年前の第一回目のオーディションを受けられましたが、緊張しましたか。

鈴木—— ちょうど豊橋に戻ってきたときで、不安がたくさんあり、また、自分の子どもが一番手がかかるときで、練習する時間も取れないし、今までになく緊張して受けたのを覚えています。

中島—— 東京では、どんな活動をなさっていたのですか。

鈴木—— 大学時代から、いろんなところで演奏する機会を運よくいただけていました。

中島—— 得意な曲や、好きな曲はどのようなのですか。

鈴木—— ショパン、ドビュッシーはすごく好きですし、スペインのグラナドスやモーツァルトも好きです。オーディションは、ドビュッシーの『喜びの島』を演奏しました。

中島—— それが審査員に高く評価されたことが印象に残っています。その後、豊橋での活動はいかがですか。

鈴木—— 今は、「小さいうちに生の音楽を聴いてほしい」という思いがあって、幼稚園を中心にコンサート活動をさせていただいています。

中島—— 新しい資格を1つお取りになったとうですが。

鈴木—— メンタルフィットネスのトレーナーの資格を、2、3年前に取りました。短期留学でザルツブルクに行ったときに、そういうレッスンがあったのです。「心から無にしてほぐしていく」ことがステージで生かされるというのは学び、日本に帰ってきてからもレッスンを受けていました。ピアニストはアスリートと一緒に、メンタル面も鍛えた方が、より良いパフォーマンスができると思うので、豊橋に戻ってから指導者としてピアノを教えるだけでなくメンタル的なサポートもできるようになりたいなと思ったのです。

高田—— このコンサートで選抜された方には、オーディションを受けた年の秋から冬にかけて1回、翌年の春から夏にかけて1回と、最低2回は出演していただいております。鈴木さんは、1回目と2回目で何か変化はありましたか？

鈴木—— 1回目は「豊橋で受け入れてもらえるのか」という緊張感があったのですが、2回目の方は、「お客さまに喜んでもらおう」という気持ちが強くなりました。やはりPLATでワンコインコンサートを2回やったことで、周りの人から、「次、PLATでやるのはいつ」と聞かれることも多く、生徒からも、「先生早くやってよ、やってよ」と言われるようになりました。

高田—— 選曲はご自身の得意な曲や、好きな曲が中心ですか。

鈴木—— やはり、まずは自分が好きな曲を弾くことが一番思いが伝えられるかなと思います。

高田—— 学校のアウトリーチにも行かれてますよね。その時は、どのようなプログラムを行っていますか。

鈴木—— 演奏が3割、中をのぞいてもらって「そこで弾くとうなるよ」とか、ピアノについてが7割。2回目のときは、「みんなで曲を作ってみよう」と。

高田—— 子どもたちの反応はいかがでしたか。

鈴木—— みんなすごく目がキラキラして、反応が素直に返ってきます。

中島——鈴木さんは何歳からピアノ始められたのですか。

鈴木—— 4歳か5歳と聞いています。おばあちゃんの家のピアノをあまりにも楽しそうに触っていたから、「じゃ音楽教室に連れて行ってみよう」となって始めたのです。

中島——鈴木さんが、今後PLATでやりたいコンサートの企画案を拝見しましたが、そのプログラムの中で聴きどころはどういったところでしょうか？

鈴木—— やはり、一番自分の好きなものでもあるモーツァルト。なかでも、皆さんがよく知っている『トルコ行進曲』。実は、この前に数曲あって、最後に『トルコ行進曲』なんだよと、知ってもらえたらなと。あとは、ガーシュウインの『ラブソディ・イン・ブルー』。「ピアノはオーケストラだよ」と言われる楽器、それを体もトレーニングを積んでいつでも一人で表現できたらなと思っています。

中島—— ライフワークとして、何年か後にはこれをやってみたいというようなことはありますか。

鈴木—— ショパンの舞曲がすごく好きで。そのなかでも『マズルカ』は、作品が4つ集まって1曲になるので、全曲やるとすごく長いのですが、何年かかけて、全曲やるコンサートができたらなと思っています。

中島——最後に、私たちに期待や要望するものがあれば。

鈴木—— ワンコインコンサートで感じたのは、皆さんがすごくサポートしてくださり、もちろん、お客さまの集客やステージングでもアドバイスをいただきました。自分だけでやっていると自己満足で終わってしまうので、そういう外からの言葉は大事ななと感じました。これからもそういうサポートをしていただけたら、うれしいなと思います。

やはり、私たちは演奏者で、営業とか、スポンサー探しはすごく苦手な分野なので。ほんとに、そういうのをPLATさんのチームでやってくださったから、自分は演奏に集中できたと感じました。

中島——演奏に集中していただいて、これからもぜひ、華やかな演奏をお願いします。観客の皆様は、しみじみと音楽を聴いて、よろこんでいる方が本当に多いのです。ワンコインコンサートが、地域の方々やお年を召した方々、あるいは、「これからやりたいな」と思っている方々に与えた影響力は、計り知れないと思います。私たちも刺激を受けて、皆さんのお役に立ちたいと思っています。どうかよろしくおねがいします。

プラットワンコインコンサート2019

若手音楽家育成事業

11月29日[金] 公演終了

白井那奈&高柳満理奈

『ピアノの調べ

～バロックから近現代へ～』



1月5日[日]14:00 開演

会場＝PLAT アートスペース

Trio Esters(トリオ・エステル)

満吉香苗、岡田薫子、鈴木風香

『フルートで起こす化学反応

～トリオで奏でる新たな響き～』



3月19日[木]14:00 開演

会場＝PLAT アートスペース

Lis(リス)

波多野千夏、寛悠里、植田結衣

『歌の翼に乗せて

～3人の女たちの響宴～』



白井那奈&高柳満理奈
2013年、愛知県立明和高等学校音楽科で出逢った二人のピアニストによるデュオ。2019年、プラットワンコインコンサートのオーディションをきっかけにデュオを組む。各々のソロと連弾を組み合わせたプログラムで、ピアノの多様な美しい音色を届ける演奏を行う。

白井那奈[しらい・なな]は現在、昭和音楽大学音楽学部ピアノ演奏家コース4年在学中。

高柳満理奈[たかやなぎ・まりな]は現在、東京音楽大学ピアノ演奏家コース3年在学中。

Trio Esters(トリオ・エステル)
満吉香苗[みつよし・かなえ]フルート、岡田薫子[おかだ・かこ]フルート、鈴木風香[すずき・ふうか]フルート／2018年12月に行われた愛知県立芸術大学フルート専攻生による自主公演「Flute potpourri Vol. 5」にて、非常に珍しい低音フルート楽器による三重奏に挑んだことをきっかけに結成。メンバーは同大学3年生、4年生、大学院1年の学年の異なる3人によって構成されている。「Esters」とは、化学反応によってできる化合物のこと。優雅なイメージのあるフルートだが、化学反応が起きるような新たな響きを生み出すことを目標として活動をしている。

Lis(リス) 波多野千夏[はたの・ちなつ]ソプラノ、寛悠里[かけひ・ゆり]ヴァイオリン、植田結衣[うえた・ゆい]ピアノ／2019年5月に名古屋音楽大学の学生で結成されたトリオ。ソプラノ、ヴァイオリン、ピアノという珍しい編成で活動を行っている。Lisとは仏語で“百合の花”を指し、百合の花の花言葉には「女性が美しく歩く姿」という意味がある。わたしたち3人も美しい音楽を奏でながら、ひとつひとつ前進して行きたいという想いが込められている。編成にとらわれず、様々な音楽を楽しみたいという想いで、わたしたちの音楽を皆様にお届けいたします。

1月26日[日]16:00開演
指揮＝三ツ橋敬子
ヴァイオリン＝正戸里佳
管弦楽＝新日本フィルハーモニー交響楽団
会場＝ライフポートとよはし コンサートホール

新日本フィルハーモニー交響楽団 ニューイヤー・コンサート

一期一会を大切に、いつもと違う事がしてみたい
観客と一緒に過ごす時間を持てたらいいですね。

聞き手 中島晴美 穂の国とよはし芸術劇場ROHM シニアプロデューサー

音楽の力、それは人と人を繋ぐ大きな力。三ツ橋敬子

指揮

中島—— 三ツ橋さんはなぜ指揮者を選ばれたのでしょうか。

三ツ橋—— 小さいときから音楽教室に通っていたのですが、音楽家になろうというのはなく、勉強の傍ら音楽に触れていました。中学三年の時に音楽教室の海外公演で、初めての海外、イスラエルに行きました。そこでイツハク・ラビン首相の奥さまが主宰をされているチャリティーコンサートに私たちは出演し、首相官邸の昼食会にもお招きいただきました。その昼食会の前後にピアノで即興演奏をするという役目を仰せつかり、首相ご自身が、ピアノの鍵盤を4つほど叩き、その音を主題にして短い曲を演奏したのです。

即興演奏という、その場で生まれてその場で消えていく、一期一会の音楽に首相も奥さまも喜んでくださり、音楽を通じて心が通い合うという経験は、本当に深い思い出になりました。しかし、4日後に首相は反和平派の青年の銃弾に倒れたのです。最後の演奏会の最中にけたたましいベルの音になりました。緊迫し、国外に出られないかもしれないというシビアな状況に、衝撃を受けました。

それまで私は法律の勉強をして検察官になれたらいいなという夢を持っていたのですが、そういうものが一瞬にして崩れ去り。何を目指して生きていったらいいのだろうかを考える大きなきっかけになりました。音楽の力は直接人を救うことはできませんが、人と人をつなぐ大きな力になるというイスラエルでの経験が新鮮によみがえりました。

また、そのころ、いろんな指揮者の伝記を読んだり、リハーサルの映像を音楽教室で見たり、自分でも探しました。その中で指揮者がリハーサルをしたり、音楽を作るという場面に惹かれ、せっかく大学で時間をかけて勉強するのなら、たくさんのことを学べる指揮に挑戦してみたいと思いました。

中島—— 普通だとしり込みしてしまうような経験で、またもう一つ前に進まれるということがすごいですね。

三ツ橋—— やはり言語や決まりを越えた人のつながりというものを、その数日間に濃密に経験をしたことが、大きな糧になっていたのだと思います。

中島—— 女性が大勢の人たちをまとめるというのはとても大変ではないですか。

三ツ橋—— よく聞いていただく質問ですが、私自身は男性との違いとか、女性だからの苦労というのはわかりづらいのですが、女子校に通っていたということが、知らずに飛び込めた原動力だと思います。6年間、すべての役割を女性がやって当たり前。小学校の時は、例えば児童会長は男の子で、副会長が女の子ということにまったく疑問もなかったのですが、そこから解き放たれ、全員が何かを担うという。そういう境目を考えない思春期を過ごしたのは大きいですね。

中島—— 子どもたち向けのコンサートもやられています、どのように子どもたちと接していらっしゃるのですか。

三ツ橋—— 4年前からやらせていただいているのですが、教えるというわけではなく、神奈川県立音楽堂が主催をし、私がプログラムやテーマを考え、関連企画についても意見を言わせていただきながら、皆さんと一緒に作り上げているコンサートです。

準備に長い時間をかけて、1曲1曲のプログラムからカットなど、例えばどういうソリストをゲストにお呼びするか、その方とどういう曲をやるのかも、全て携わっていろいろやらせていただいています。その他に、照明の演出とか、舞台の上に子どもたちが上がって聴くというコーナーもあるのですが、そういう細かいところまで、やらせていただいています。

中島—— 合唱の指導もされると聞きましたが。

三ツ橋—— 今年の年末に明石と琵琶湖で第九があり、指導に2回ずつ行かせていただきます。

日本はかなり第九やレクイエムを歌うという市民合唱団の活動が盛んです。そういう団体はそれぞれが普段の指導の先生を持っていらして、春ぐらいから第九を始めて、初心者の方でも歌えるように丁寧な指導をしてくださっています。原語に関しても、それぞれの指導者の先生のご指導があつての上で、よりどういうふうに発音することがいいのかをリハーサルの中で言わせていただいています。

中島—— 今日は音楽のことを聞く以前に、人間 三ツ橋敬子さんにお話を伺ったようで、とても豊かな気持ちになりました。1年の始まりのニューイヤー・コンサートに豊橋の方にメッセージをいただければと思います。

三ツ橋—— 正月の華やかな気分で新しい年が明け、そして1月の終わりにいつもと違ったことがしてみたいとか、何か素敵なことに体や心をゆだねてみたいとか。コンサートというかしてまったことではなく、一緒に時間と空間を過ごし、一緒にいい年を祈りながら音楽の美しさに心を揺さぶられる時間を持てたらいいと思います。

中島—— ありがとうございます。

瞳がキラキラしたとってもチャーミングな女性でした。音楽の道を選んだきっかけを伺い、その体験談も驚かされました。それゆえに「一期一会」が重く響きました。幸せて歓びの多い年になるよう、ニューイヤー・コンサートのひと時を豊橋の皆さんと分かちあいたいですね。

三ツ橋敬子[みつはし・けいこ]／東京藝術大学及び同大学院を修了。ウィーン国立音楽大学とキジアーナ音楽院に留学。第10回アントニオ・パドローティ国際指揮者コンクールにて日本人として初めて優勝。第9回アルトゥーロ・トスカニーニ国際指揮者コンクールにて女性初の受賞者として準優勝。併せて聴衆賞も獲得。第12回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。09年にはNewsweek Japan誌にて「世界が尊敬する日本人100人」に選出。2011年には、TBS系列ドキュメンタリー番組「情熱大陸」に取り上げられた。2016年から神奈川県立音楽堂にて「三ツ橋敬子の夏休みオーケストラ!」がスタート。子供たちへ多彩な音楽体験を届ける企画内容が好評を得ている。



撮影：Hisayoshi Osawa

正戸里佳[まさと・りか]（ヴァイオリン）／大きな期待を集める若手実力派ヴァイオリニスト。広島市出身。10歳で、欧州でコンチェルトを演奏。06年17歳でバガニーニ国際コンクール第3位。16年ドミニク・ペカット国際コンクール第1位。桐朋学園女子高等学校を首席卒業後、同大学ソリスト・ディプロマ特待生を経て渡仏。パリ国立高等音楽院修士課程を首席卒業後、最高課程を修了。ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽大学修士課程を修了し、パリを拠点に国際的に活動中。バンク・ポピュレール財団アーティスト。18年にデビューCD『パリのヴァイオリン・ソナタ集』（キングレコードレコード芸術準特選盤）をリリース。JAL国際線機内オーディオにも搭載され、19年～ 20年には上野の森美術館と兵庫県立美術館で開催されているゴッホ展の音声ガイドにも使用されている。また、18年度に「ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ全10曲3回シリーズ」（共演：岡田将）を完遂し、大好評を得た。今後ますますの活躍が期待されている。

新日本フィルハーモニー交響楽団

New Japan Philharmonic

1972年、指揮者・小澤征爾のもと楽員による自主運営のオーケストラとして創立。97年、墨田区に移転。同年オープンすみだトリフォニーホールを活動の本拠地とし、日常の練習と公演を行うという日本初の本格的フランチャイズを導入。定期演奏会や特別演奏会の他、地域に根ざした演奏活動も特徴的。99年、小澤征爾が桂冠名誉指揮者に就任。

2010/2011シーズンよりダニエル・ハーディングが“Music Partner of NJP”を務めた（～2015/2016シーズン）。受賞歴に三菱UFJ信託音楽賞（09年、アルミンク指揮）、ミュージック・ベンクラブ音楽賞（09年、ブリュッヘン指揮）等。16年9月より指揮者・上岡敏之が音楽監督を務めている。この他、04年に音楽家・久石譲と立ち上げた“新日本フル・ワールド・ドリーム・オーケストラ”で幅広い人気を集めているほか、映画『千と千尋の神隠し』『ハウルの動く城』『崖の上のポニョ』では管弦楽を担当。斬新な企画と優れた演奏は高く評価されている。

PLAT主催公演情報

『ドクター・ホフマンのサナトリウム 〜カフカ第4の長編〜』



多部未華子

瀬戸康史

音尾琢真

12/20 [金] 18:30 開演

12/21 [土] 13:00 開演 / 18:30 開演

12月21日13:00のみ

12/22 [日] 13:00 開演

『ドクター・ホフマンのサナトリウム

〜カフカ第4の長編〜』

アウトサイダーにしてトップランナーという、特異なポジションで日本演劇界を席巻し続けるケラリーノ・サンドロヴィッチ(KERA)が、書き下ろし新作を上演!今回KERAが選んだ題材は、これまでも度々取り上げてきた彼が敬愛する作家・フランツ・カフカ。「失踪者」「審判」、そして遺作長編とされていた「城」に続く、カフカの4作目の長編小説の遺稿が発見されたとしたら!?それを舞台化されたとしたら!?誰も知らないカフカの未発表長編の舞台化にKERAが挑戦。彼のマジカルな想像力が幻視する、ありもしないカフカ作品の捏造。今年一番の話題作です!

●作・演出＝ケラリーノ・サンドロヴィッチ●出演＝多部未華子、瀬戸康史、音尾琢真 ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席9,000円、A席7,000円、B席5,000円ほか●前売予定枚数終了：当日券については12月以降にお問合せください。

2020/1/5 [日] 14:00 開演

ブラットワンコインコンサート2019

Trio Esters(トリオ・エステル)

『フルートで起こす化学反応

〜トリオで奏でる新たな響き〜』

「若手音楽家に活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を提供する」というコンセプトのもと、オーディションで選抜された若手音楽家たちによる音楽のひとときをお届けする、ブラットワンコインコンサート。三名のフルート奏者でお贈りするコンサートお楽しみください。

●出演＝Trio Esters(トリオ・エステル)満吉香苗(フルート)、岡田薫子(フルート)、鈴木風香(フルート)●曲目＝『華麗なる奇想曲・3人の名人 Op.31』(L.ロレンツォ)、『スペイサイド(低音フルートトリオの為の)』(多久潤一郎)ほか●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・整理番号付]500円●上演時間＝60分

ブラットワンコインコンサート2019

Trio Esters『フルートで起こす化学反応〜トリオで奏でる新たな響き〜』



託児サービス対象公演

要予約。生後6ヶ月以上。
お一人様 ¥500。お申込み、お問合せはブラットチケットセンターまで



マイセレクト4 対象公演



マイセレクト4
2019

新日本フィルハーモニー交響楽団 ニューイヤー・コンサート



三ツ橋敬子 ©大杉隼平

正戸里佳 ©Hisayoshi Osawa

2020/1/13 [月・祝] 13:00 開演

二兎社公演43

『私たちは何も知らない』

永井愛の作・演出による新作公演。明治44年、20代の女性5人が集まって雑誌「青鞥」を創刊した。雑誌作りという冒険を通して味わう高揚感や苦悩を描く青春群像劇。●作・演出＝永井愛●出演＝朝倉あき、藤野涼子、大西礼芳、夏子、富山えり子、須藤蓮、枝元萌●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席5,500円、A席4,500円、B席3,000円ほか

好評発売中



2019マイセレクト4
対象公演(B席のみ)

2020/1/26 [日] 16:00 開演

新日本フィルハーモニー交響楽団

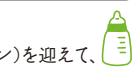
ニューイヤー・コンサート

指揮に三ツ橋敬子を、ソリストに正戸里佳(ヴァイオリン)を迎えて、2020年の幕開けにふさわしい華やかな楽曲を演奏いたします。

●指揮＝三ツ橋敬子●ヴァイオリン＝正戸里佳●管弦楽＝新日本フィルハーモニー交響楽団●曲目＝『ヴァイオン協奏曲小短調』(メンデルスゾーン)、『美しく青きドナウ』(ヨハン・シュトラウスⅡ世)、『皇帝円舞曲 op.437』(ヨハン・シュトラウスⅡ世)ほか●会場＝ライブポートとよはし コンサートホール●料金＝[全席指定]S席4,500円、A席3,000円、S席ユース(24歳以下)2,200円、A席ユース(24歳以下)1,500円

好評発売中

ライブポートとよはし

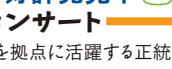


2020/2/11 [火・祝] 16:00 開演

小曽根真&児玉桃 スペシャル・コンサート

自由奔放なジャズ・ピアニスト小曽根真と、欧州を拠点に活躍する正統派クラシックピアニスト児玉桃の共演。コンサート後半には打楽器奏者の西岡まり子、大場章裕を交え、2台のピアノと打楽器のための協奏曲を披露するなど夢の饗宴となるコンサートを心からご堪能ください。●ピアノ＝小曽根真、児玉桃●打楽器＝大場章裕、西岡まり子●曲目＝『4つのマズルカ op.24』(ショパン)、『幻想即興曲 嬰ハ短調 op.66』(ショパン)、『2台のピアノと打楽器のためのソナタ Sz110』(バルトーク)など●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席6,000円、A席4,000円、S席ユース(24歳以下)3,000円、A席ユース(24歳以下)2,000円

好評発売中



二兎社公演43

『私たちは何も知らない』

小曽根真&児玉桃 スペシャル・コンサート



小曽根真 ©大杉隼平

児玉 桃 ©Marco Borggreve

大場章裕

西岡まり子

2020/3/7 [土] 14:30 開演・8 [日] 14:30 開演

市民と創造する演劇

『グッバイ・フランケンシュタイン

一穂の国の怪物たち〜』

メアリー・シェリー原作の「フランケンシュタイン」を元に、東京を中心に活動している劇団青☆組の吉田小夏が上演台本・演出を担当します。公募による市民出演者・スタッフとプロのスタッフで創りあげるPLATオリジナルの舞台をお楽しみください。●会員先行＝2020年1月5日(日)●一般発売＝2020年1月18日(土)●原作＝メアリー・シェリー●脚本・演出＝吉田小夏●出演＝オーディションで選ばれた一般市民／大西玲子、細身慎之介●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]一般2,000円、ユース(24歳以下対象)1,000円、こども(高校生以下)500円

3月7日14:30のみ

2020/3/19 [木] 14:00 開演

ブラットワンコインコンサート2019

Lis(リス)

『歌の翼に乗せて〜3人の女たちの饗宴〜』

「若手音楽家に活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を提供する」というコンセプトのもと、オーディションで選抜された若手音楽家たちによる音楽のひとときをお届けする、ブラットワンコインコンサート。ソプラノ歌手、ヴァイオリン、ピアノの3名で構成されるLis(リス)。実力十分の聴きごたえある3名の共演をお楽しみください。

●出演＝Lis[リス]波多野千夏(ソプラノ)、寛悠里(ヴァイオリン)、植田結衣(ピアノ)●曲目＝『喜歌劇「ジュディッタ」より熱きロづけ』(レハール)、『ヴァイオリンソナタ第1番ト長調「雨の歌」第一楽章』(ブラームス)、『愛の夢』(リスト)ほか●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・整理番号付]500円●上演時間＝60分

好評発売中

ワークショップ・レクチャー

豊橋アーティスト・イン・レジデンス

ダンス・レジデンス2019

「ダンス・レジデンス」とは、国内外で活躍するアーティストに新しい作品創造のための稽古場と滞在場所を提供し、アーティストへの支援・育成をおこなうとともに、ワークショップ・試演会等を開催し、市民とアーティストの交流の機会を設け、舞踊や身体表現を身近に体験していただくプログラムです。

2019年度滞在アーティスト カンパニーデラシネラ

2008年設立。マイムをベースに台詞を取り入れた独自の演出で、世代を越えて注目を集めている。国内での活動のほか、海外公演など多数。また古典名作シリーズ(第1弾『ロミオとジュリエット』、第2弾『ドン・キホーテ』)では、身体性に富んだ演劇作品で中学校巡回公演を行い、次世代へのアプローチに積極的に取り組んでいる。その他、野外や美術館、アートフェスティバルなど、劇場内にとどまらない場所でのパフォーマンスも多い。2020年2月下旬KAAT神奈川芸術劇場にて上演予定の新作公演『どこまでも世界(仮)』の創作活動として滞在。滞在中には、小野寺修二によるダンス創作ワークショップ&ショーイングと、稽古場公開、成果発表会を行います。

2020/1/17 [金]ー19 [日]

ダンス創作ワークショップ&ショーイング『甘えの構造』

●講師＝小野寺修二ほか●日時＝2020/1/17 [金]19:00～21:00、18 [土]13:00～18:00、19 [日]13:00～18:00(17:00～17:30 作品発表会。見学無料・事前申込不要)(全3回)●会場＝PLAT創造活動室B●対象＝高校生以上で、3日間全日程(ワークショップ&ショーイング)に参加可能な方。●定員＝10名(選考)●参加費＝3,000円●申込方法＝①参加申込書に必要事項を記入の上、窓口持参かFAX(0532-55-8192)②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み。●締切＝1月4日(土)17:00 必着

2020/1/27 [月]18:00～20:00 稽古場公開

滞制作の稽古場公開を行います。創作過程の様子を観れる機会です。ぜひお気軽にお越しください。●会場＝PLAT 創造活動室A●参加費＝無料(事前申込不要)

2020/2/2 [日]14:00～15:00 成果発表会(作品試演&トーク)

滞制作の作品試演会(成果報告会)とアーティストによる作品や創作についてのトークを行います。創作作品の一部を間近で観れる機会です。ぜひお気軽にお越しください。●会場＝PLAT 創造活動室A●参加費＝無料●申込方法＝①ブラットチケットセンター電話・窓口(0532-39-3090)にて要事前申込み。②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み。

ブラットワンコインコンサート2019

Lis『歌の翼に乗せて

〜3人の女たちの饗宴〜』



植田結衣



寛 悠里



波多野千夏



カンパニーデラシネラ 小野寺修二

「プロってなんですか？」

芸術文化アドバイザー

桑原裕子



昔、というにはまだ遠くない過去の話。

ある商業系の芝居に関わっていたとき、芸能人と呼ぶに相応しいある俳優さんが突如其ろ古を中断し、共演の俳優たちに向かってこのようなことを言ったのです。「ふざけた芝居はしないでほしい。君たちは小劇場でずっとやって来たんだろうけど、僕は映像もやるし、プロの現場に関わってきたわけ」

細かいニュアンスは憶えてませんが、要は共演者の「小劇場芝居」が気に食わん、ということが言いたいらしいでした。その時共演者の面々は、芝居の隙間にギャグを挟んで稽古場で笑いを取っていました。いわゆるアドリブ的なもので。

怒った俳優さんからすると、そんなものは芝居に雑味を生じさせるだけの、陳腐で浅はかな脱線に過ぎない。こちらが真剣に物語を紡いでいるのになんだ、ということなのでしょう。

その弁だけを聞くと正論だと思います。確かに必要不可欠なジョークではなかったですし。ただ、実はそのアドリブ、随分前の稽古時から言っていたのです。面白いから採用され、この日の通し稽古で初めて耳にしたスタッフから笑いを取っていたのですが、怒っている俳優さんは、それまで何度となく言っていたはずのアドリブにこの日、周囲の笑い声で初めて気づいたのです。

はこの場合、どっちが問題なんだ、という話です。

自分の演技に集中しすぎて共演者の台詞を聞いておらず、演出家(私です)が許しているジョークを今さら知って怒った。挙げ句、わざわざ稽古を中断させて…。

よほどそちらの方がプロ意識に欠けるのでは?と思うのですが、叱られた「小劇場でやって来た人たち」は、その俳優に対して、言い返すことはしませんでした。

テレビに出ている、大劇場に立ってきた、人気がある、などの理由で番手が上の俳優は、その現場では強い立場。無闇にたてついても場の空気を悪くするだけで、その俳優がへそを曲げてしまったら稽古が進まない。弱者だから口をつぐむほかないというよりは、稽古に支障を来さないための大人の判断で「小劇場でやってきた人たち」は、ワガママな「プロ」のお叱りを静かに受けたのでした。

演劇界におけるプロとアマチュアの違いってなに？

俳優なら、特に日本の小劇場出身なら、誰もがふと立ち止まり考えてしまう問題です。海外にはちゃんと俳優のライセンスがあり、階級に応じてギャランティや待遇を変えている国もありますが、日本はプロアマの境界線がかなり曖昧です。資格取得試験もないし、オーディションで大舞台に出てもいきなりプロとは認定されません。俳優の仕事だけで食べていければプロ、というのもひとつの考え方ですが、事務所に入っているかどうか、タレント的な人気があるかどうかでギャラも違ってきますから、演劇界には「食えてない名優」もごろごろいます。彼らは「アマチュア」なのでしょうか？

また、小劇場から芝居を始めた俳優、小劇場に好んで立ってきた俳優が、仮に大劇場や映像で活躍し始めたとして「プロになった」というのも、なーんか違うぞ、という気がします。が、一般的にはテレビなどに出て認知度が上がると親戚なんかに「ついに裕子ちゃんもプロになってねえ」なんて言われたりする

もので…うむ。

こういうジレンマや、先述のように理不尽な体験を「小劇場でやってきた人たち」は、数多く味わっていると思います。しかし、小劇場俳優の権威向上を!とは、思いません。なぜかってほんとのところ、小劇場ってだれでも始められるのが魅力だったりもするからです。

遊び半分ではじめたものが、やがて芝居の面白さに目覚め、貧乏上等でのめり込み、半ば意地のように続けているうちに、何となくものになってきたぞ、もしかすると自分の居場所はどこしかない…というルートも許されるのがこの世界。

修行たる修行もなく、夢中で好きなことをやってお金もらえるのなんて夢みたい、なんて思っているうちに自分がプロかアマかなんてどうでもよくなってくる。

イージーでファジーな入口だからこそ、私なんかここまでやってこれたのだと思います。もちろん、人生すごろくにしてみれば「借金地獄で一年休み」「仲間ととりが合わず劇団を脱退」「自分は婚期を逃してるのに人の結婚式の余興が続いて痛い出費」「事務所ともめてふりだしにもどる」などなど、曲がり道いばらの道はたくさんあるわけで、いつの間にかこの世界から足を洗う人たちもとても多い。

知恵と体力、飽くなき探究心、ハートの強さ、そしてもちろん演技の技術、あらゆる武器を用いて磨いて、サバイバルせねばなりません。つまり、生き抜いていれば誰でもプロ。武器を誰かに借りたり手入れを怠ったりしているうちはアマ、ということかも知ない、とこれを書いてて思い至りました。

さて、私も怠けず、武器のお手入れをしなくちゃな…。

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

YOSHINO ASSOCIATES
architect
engineers
吉野設計研究所
http://www.440a.co.jp

有限会社 魚伊
電話 52-5256

株式会社 竹尾建築設計事務所
代表取締役 竹尾 誠
豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 〒440-0035 Tel.0532-62-1331(代) Fax.0532-62-1332
浜松事務所/浜松市東区流通元町13 〒435-0007 Tel.053-422-3628(代)

グロリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話 053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科 婦人科(不妊治療)
豊橋市新本町23 (豊橋市産婦人科) 院長 氏

ケンチク 701
KURONO ARCHITECT STUDIO
✉ y.qlo0170@gmail.com

うつ、統合失調症、精神遅滞、発達障害、脳梗塞、人工透析、人工関節など
豊橋・豊川障害年金相談センター
初回相談無料 ☎0120-891-498
豊橋市花中町 160-9 障害年金専門社会保険労務士 竹下英司

看板広告 アラキスタディオ
豊橋市上伝馬町16 電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

ONOCOM なければつくる
株式会社オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・肛門科
医療法人栄真会 伊藤医院
豊橋市小池町字原下35 電話45-5283(代)

創業文政年間 数えく宗
豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL.53-2809

豊橋銀行協会 (順不同)
三菱UFJ銀行 みずほ銀行 静岡銀行 名古屋銀行
三井住友銀行 三井住友信託銀行 清水銀行 第三銀行
十六銀行 愛知銀行 中京銀行 大垣共立銀行

創業江戸 御茶屋菓子専門店
若松園
御菓子司

西村能舞台
豊橋市上伝馬町
代表＝西村 能三
Mail=nnbutai@gmail.com

気まぐれコンサート
事務局/0532-62-9259(小川恵司)

安心・安全な地下駐車場
パーク500
プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は30分150円を30分100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
医療法人 塩之谷整形外科
理事長 塩之谷 昌 院長 塩之谷 香 副院長 市川義明
豊橋市植田町関取54 電話 0532-25-2115(代)

豊橋名産 傘あくわ

井上皮膚科クリニック
診療時間 月・火・木・金 10:00～13:00 16:00～19:00
土 10:00～14:00 休診日＝水・日・祝
電話 0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久 豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

ほん せん どう
本の豊川堂
本店・カルミア店・アビタ向山店・プリオ豊川店
セントファレン田原店・ささしまグローバルゲート店

ISO 9001 ISO 14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

Storyteller tells the Story
物語コーポレーション

生活にフィंकオリティ
sala

広告募集

チケットの購入・お問合せ

プラットチケットセンター

電話・窓口
0532-39-3090 [休館日を除く 10:00～19:00]
オンライン
http://toyohashi-at.jp [24時間受付・要事前登録]



プラットフレンズ募集
入会金・年会費無料

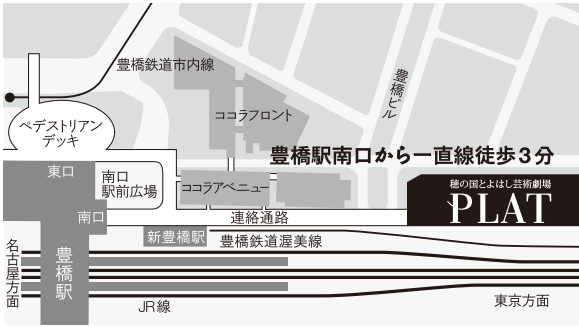
特典
1 公演情報をメールでご案内します。
2 インターネットでチケット予約ができます。
3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページから登録いただけます。

U24・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
料金
U24[24歳以下対象]:公演ごとに指定する席種の半額
高校生以下:一律1,000円
購入方法
各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

年末年始休館のお知らせ

穂の国とよはし芸術劇場は、下記の期間休館いたします。
令和元年12月29日(日)～令和2年1月2日(木)
なお、上記の期間中プラットチケットセンターは電話および窓口とも休業いたします。
チケットのご予約は、インターネットをご利用ください。
24時間対応いたしております。
休館中のチケットのお引き取りについてはご予約の際にご確認ください。



〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話＝0532-39-8810[代表]
開館＝9:00～22:00 休館日＝第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、
新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT